

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	田村 昌己
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) バーヴィヴェーカ中観思想の研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 根本 裕史		
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授 後藤 弘志		
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授 衛藤 吉則		
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授 赤井 清晃		
審査委員 (Name of the Committee Member)	国際仏教学大学院大学・教授 斎藤 明		
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、インド大乘仏教中観派バーヴィヴェーカ（490～570頃）の主著『中観心論』およびその註釈『思釈炎』に基づき、バーヴィヴェーカによる瑜伽行派批判の特色とその意義を解明したものである。</p> <p>序論では、瑜伽行派の学説への批判が展開される『中観心論』第5章の構成を示し、問題の所在を明らかにしている。</p> <p>本論第1章では、バーヴィヴェーカが用いる推論の意義とその構造を検討している。まず、『中観心論』第5章の推論が、瑜伽行派を仏説の正しい理解へ導くという教育的意義を有することを指摘する。次にバーヴィヴェーカの推論が「ある二者が共通性質を有するならば、それらは無区別である」という論理によって確立されること、その推論の教義的基盤をなすのが説一切有部の四大種説や経量部の認識論であることを論じている。さらに、バーヴィヴェーカの推論にしばしば現れる「勝義のレベルでは」という限定句の適用領域に着目すると、彼が他学派の説を世俗の真実としても受け入れていないことが明らかになるとしている。</p> <p>第2章では、瑜伽行派の空性理解に対するバーヴィヴェーカの批判を検討している。まず、空性を「無の有」と捉える瑜伽行派の理解について、バーヴィヴェーカは帰謬法を通じてその矛盾点を指摘し、批判を行なっているとす。次にバーヴィヴェーカによる瑜伽行派の三性説に対する批判を取り上げ、彼が世俗のレベルでは言葉とその指示対象の対応関係を認めた上で、実有ならざる諸法を根拠とする仮設の構造を説いていること、勝義のレベルでは諸法は縁起するがゆえに無自性であり、そのことこそが修道論の根拠になると考えている点を明らかにしている。</p> <p>第3章では、瑜伽行派の空性理解の基盤をなす唯心説に対するバーヴィヴェーカの批判を検討している。まず、バーヴィヴェーカが世俗のレベルにおいては経量部的な立場に立脚して、瑜伽行派が外界対象の無を確立するために提示する「夢の認識」の比喻の不合理性を説き、認識をもたらす外界の事物の存在を主張している点を明らかにしている。次に、瑜伽行派の唯心説が説かれるディグナーガの『観所縁論』に対する批判を取り上げ、バーヴィヴェーカは同種の極微の集合体を実有とみなしていること、瑜伽行派が主張するように識が実在であるとするならば、認識の生起や輪廻から解脱へ至る過程が説明できなくなるとして批判していること、瑜伽行派が主張する唯心の肯定と外界対象の否定は増益と損減の二極論に他ならないと主張していることを明らかにしている。</p>			

結論では、バーヴィヴェーカの『中観心論』において展開される瑜伽行派の主要な学説に対する一連の批判が、中観派の学派意識の形成に大きく寄与したとしている。

付論では、『中観心論』およびその註釈『思釈炎』の第5章の翻訳研究を与えている。

本論文は、必ずしも良好な状態では残っていない『中観心論』サンスクリット原典の正確な読みと、チベット語訳のみで伝わる『思釈炎』の新解釈を提案すると共に、大乘仏教における学派意識の形成という問題について新たな提言を行なっている点で独創的である。中観思想史の解明に資する研究として評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)